



SUCRA さくら
学術情報発信システム / 埼玉県地域共同リポジトリ

Institution	文教大学
Title	中世ドイツの家父学
Author	福田, はぎの
Citation	家政学事典 (日本家政学会編, 朝倉書店, 1990. 11) p.59
URL	http://sucra.saitama-u.ac.jp/modules/phoonips/detail.php?id=BKK0000980

- SUCRA に登録されているコンテンツの著作権は、執筆者、出版社(学協会)などが有します。
- SUCRA に登録されているコンテンツの利用は、著作権法に規定されている私的使用や引用などの範囲内で行ってください。
- 著作権法に規定されている私的使用や引用などの範囲を超える利用を行う場合は、著作権者の許諾を得てください。ただし、著作権者から著作権等管理事業者(学術著作権協会、出版者著作権管理機構など)に権利委託されているコンテンツの利用手続きについては、各著作権等管理事業者に確認してください。

4.3 中世ドイツの家父学

家父学はこれまでの家政思想史研究では必ずしも定説化された領域ではないが、ここでは17世紀から18世紀にかけてもっぱらドイツで発達した家父あるいは家長向けの体系的な教養書の一群を家父学とみなしておく。それらは従来「農書」分類の1項目(『世界歴史事典』第15巻, p. 75, 平凡社)でもあり、中でも著名なのはミュンヒハウゼン(Münchhausen, O. V.)の『家父書』(Der Hausvater)であった。一方、それらを伝統的な家政書として再評価するという近年の試みにおいて、特に日本でも紹介されたのは、ホーベルク(Hohberg, W.H.F.)の『ゲオルギカ クリオーサ Georgica curiosa (緻密なる農業)または貴族の地方生活』である。

現代からみた家父学の農書でもあり家政書でもあるという一種の二面性は、前近代社会の当時にあつては農業経営と家政との統一的一体性をそのまま映し出したものに他ならない。伝統的農民経済に立脚して土地(領地)と人(妻子だけではなく領民も)を統べる貴族・封建領主の「全き家」(Brunner, O. 『ヨーロッパの歴史と精神』成瀬治ほか訳, 岩波書店, 1974年, IV参照)こそ、その成立基盤にあつた。家父はこの家(所領)の経営に豊富な知識をもって細心の注意を払わねばならない。家父書はそのためのいわば手引書であり、その視野の広がりにはしたがってこの経営のあらゆる領域に及ぶことは『ゲオルギカ』(前掲書)の次のような内容構成自体が示している。

第1巻は農業経営、煉瓦窯などの副業、塩抗その他の非農業的原料生産、第2,3巻は家父と家母の教え、第4巻は葡萄その他の果樹栽培と酒製造、第5,6巻は蔬菜、花卉の園芸、第7巻麦酒製造や製粉、第8巻馬の飼育、第9巻牛、羊、家禽の飼育、第10巻養蜂、養蚕、第11巻水車や水禽や水辺の土地利用、そして最後の12巻は林業と狩猟。ホーベルク自身「実際に、家政ほど広範な仕事はない」と述べているが、家父学の知識の広がり、それを貫く家政という原理が見抜かれないかぎりにおいて時に総花的な百科全書とさえみられたのである。また近代科学成立以前のこれらの知識はむろん、呪術的要素を多分に含む伝承と経験の豊富な蓄積に裏づけられたものであつた。

この家政書はさらに人間関係論ともいうべき家政の重要なテーマの所在も示唆している。ホーベルクは「家父は神を畏れ、妻と相合し、子どもを教育し、使用人と従属農民を統御し、月々の自己の経済をつかさどっていくべきである」と述べている。近代的な家族の範囲だけではなく、異なる身分あるいは立場の人間を包括する家政において、それを維持・発展させていくためには家父の自己修練とあわせて隣人の手本となるような主人夫婦の協力関係が必要だとされた。この家政学によればそもそも伝統的家というものは人々の情緒と理性の均衡を重要な構成要素とし、かつこれらの人々によるもろもろの任務の義務的達成を通じて初めて人間活動と人間関係の有機的な結合体としてのその実質を維持しうるものであつた。(福田はぎの)